

## ウクライナにおける聖心会の歴史

※こちらは、ご参考までに、聖心会本部ウェブサイト記載“[The Society of the Sacred Heart’s History in Ukraine](#)” 記事を一部翻訳してまとめたものです。

聖心会は、聖マグダレナ＝ソフィア・バラがおられた 180 年近く前から、今のウクライナ西部の都市リヴィウにシスターを派遣し、そこで教育活動をしていました。その後、数々の戦禍を乗り越え、1971 年にポーランド人の聖心会シスター・ヴァルチノフスカ (Walchnowska) が亡くなるまで、その地で聖心会としての活動が続きしました。



リヴィウでの活動が始まったきっかけは、1841 年にイエズス会の司祭の要請で、フランス由来の良い教育を望むガリシア (ポーランド) 貴族の子どものために教育を提供することだったようです。当時のリヴィウの聖心女子学院は、リヴィウの住民の特徴である開放性、寛容性、他国への同情心、そして相互の友好性を反映した校風で、様々な階層、また様々な宗教の人たちがともに学んでいました。

世界史の歴史を紐解くとこの地域が、何度もポーランド、オーストリア、ハンガリー、ソ連軍によって占領され、厳しい時代を経験していることがわかります。

ソ連占領期 (1939 年 9 月から 1941 年 6 月) には、聖心の学校の建物はウクライナの学校に占拠され、ウクライナ語の授業が課せられ、シスターたちは避難所を探し、生計を立てるために他の仕事を探すことを余儀なくされました。しかし、この時、聖心女子学院はこの街ですでに 100 年近くの歴史があり、シスターたちとその地域の人たちは友好的な関係にあったので、家庭の使用人、子供の教育係、あるいは空き家の管理など仕事を見つけて生活をしながら乗り越える事ができました。

ドイツ占領下のリヴィウでは、当時ベルリンの院長であったマザー・パウラ・ヴェルハーン (Mother Paula Werhahn) が、ドイツ国防軍にポーランドの修道院を占領させ、軍事病院として使用することに成功し、ゲシュタポ (ナチス・ドイツの国家秘密警察) による占領を免れることができました。

シスターたちはそこに留まり、少女たちのために隠れて授業を実施し、兵士の服を拾って繕う手伝いをしました。これは 1944 年 7 月のソ連による第二次占領まで続きしました。修道院は軍事病院としての役割を果たし続け、秘密裡に行われる授業も続けられました。

1945 年、旧ポーランド領はウクライナ・ソビエト社会主義共和国に編入され、リヴィウの家も閉鎖せざるを得なくなりました。1946 年の春、リヴィウと 1939 年以前にポーランドに属していた地域の全修道者に避難命令が出されました。しかし、ポーランド国民でない修道士はその土地を離れることが許されず、その中には、老齢の聖心会のシスター、チェコ人のシスターヴァヴラ (Vavra) とフランス人のシスターバイエがいました。そこで、ポーランド人の 2 人のシスター、シスターマリア・クルパ (Maria Krupa) は看護婦として、シスターエルツビエタ・ヴァルチノフスカ (Elzbieta Walchnowska) は小さな共同体の責任者として、彼女たちと行動を共にしました。彼らは幸運にも、1949 年に小さなアパートが割り当てられるまで、リヴィウの家に滞在し続けることができました。

その後、3人のシスターが亡くなり、一人残されたシスター・ヴァルチノフスカは、リヴィウからポーランドに戻る機会を得ましたが、ポーランド教皇のヴィシンスキ枢機卿（Cardinal Wyszynski）は、リヴィウに留まるよう要請してきました。また、彼女自身も、リヴィウに残ってポーランド人を助け、支える仕事を続けなくてはという思いを持っていたようでした。当時、カトリックの司祭はほとんどいなくなり、教会も閉鎖されており、ラテン語式の聖堂だけが残っていました。シスター・ヴァルチノフスカは、聖務官、秘書となりました。また、彼女は密かに子供たちの初聖体の準備をし、近隣の教会のためにご聖体を作り、ロシアに送られた司祭たちがミサを行えるように、美しい文字で Ordo（奉献文）を写しました。

シスター・ヴァルチノフスカは、体力が尽きるまでこの努力を続けました。彼女の長い闘病生活は、リヴィウでの最後の使徒職となりました。1971年2月24日、彼女はそこで亡くなりました。そして、現在のウクライナにおける本会の存在は終わりを告げました。このように、聖心会は聖マグダレナ＝ソフィア・バラの時代から、ウクライナで教育活動をし、戦禍を乗り越え、シスター・ヴァルチノフスカが1971年になくなるまで、続いたのでした。

現在、聖心会のシスターが活動するのは、ウクライナと国境を接する、ポーランドとハンガリーです。ポーランド出身の聖心会 シスターウルズラ・グロワツカ（Urszula Glowacka）はこう書いています。

「私たちはワルシャワ東駅に行き、何が起きているのかを見て、どうしたらいいのかを探しました。ウクライナからの列車はちょうど到着したところで、ほとんどが子供連れの若い母親たちでした。小さな男の子の写真が心に残っています。片方の手で母親にしがみつき、もう片方の手でテディベア-ボランティアからもらったテディベアを持ち、とても悲しげでとてもおびえた目をしているのです。ママのバッグ、それだけが彼らの財産です。思わず圧倒され、心が揺さぶられます」

「駅には、旅行者、難民、支援者、ウクライナ人のための特別な情報ポイント（ポーランドのすべての都市にあります）のボランティア、食べ物や薬など、できる限りのものを持ってくる善意の人たちが大勢いました。市場には、無料の食べ物を並べたテーブルが設置されています。バスは駅で停車し、食料や医薬品を積んで、ウクライナに帰って行きました。ウクライナからの難民は、ポーランドまでの切符を買いません。パスポートがあれば十分です。新しく到着した人たちは、学校、民家、観光センターなどに案内されます。すべてがうまく機能しています。この現実の中に、この状況の中に、不確実性の中に、変化の中に、ご自身を現される神を求める恵みを祈ります...そして、いのちに耳を傾ける力を神に求めます。"

私たちは、彼女とともに、また、この戦争を身近に触れているシスター、そして、聖心会の名において国境に存在する人とともに、このことを願います。

ヨーロッパの管区長が言っているように  
「体の一部が傷ついたとき、体全体が痛みを感じるのです。」

Lolín Menéndez RSCJ  
March 6, 2022